ビヨンドコロナの大学戦略

びわこ成蹊スポーツ大学 間野義之学長

―62―

標高1000メートルの比良山地と琵琶湖に挟まれたびわこ成蹊スポーツ大学（びわスポ大、間野義之学長、スポーツ学部）は、昨年、コース改組を行った。受験生により分かりやすい体系にし、ゼミ活動や卒業論文の執筆を重視する。大学の最大の強みは「アウトドアスポーツとデジタル」と語る間野学長に今後の大学戦略を聞いた。

強みはアウトドアスポーツとデジタル

新カリは3領域8コース、ゼミ重視

○2024年度から新カリキュラムを導入

2024年4月、従来6コースであったスポーツ学科を3領域8コースへと改組した。①コーチング領域（学校スポーツ、アスリートコーチング、アウトドアスポーツ）②マネジメント領域（スポーツ政策・文化、スポーツビジネス・メディア、スポーツパフォーマンス分析）③健康・医科学領域（トレーニング科学、健康・スポーツ医科学）である。

「開学して23年。入学定員を開学当初の2倍にしてきましたが、それはスポーツ関連の需要が広がっている証左です。スポーツには『する』『みる』『ささえる』分野があり、対象も子どもから高齢者まで幅広い。今回の改組は、大学を選ぶ高校生に、本学独自の「スポーツ学」の領域を分かりやすく示すためでもあります」と狙いを語る。

さらに、「少人数教育で、アクティブラーニングの典型であるゼミと卒業論文を最重要科目に位置付けます」と力を込める。

「全コース3年次からのゼミは、同じ曜日・時限で固定化し、その他の科目はそれ以外の曜日・時限に配置しました。ゼミを通じた卒業論文の執筆は、学生が大きく成長し、自信を持つ大切な機会です。コロナ禍ではオンライン授業が確立しましたが、やはり演習・実習・実技は対面でこそ効果が上がります。一方、大教室の講義科目などは、オンデマンドの方が有効な授業もあります。そこで学生の声を聞きながら、講義科目ごとにどちらにするかを検討しています。新規にスタジオを設置し、教員が授業映像を簡単に作成できるようにしました。小規模大学ならではの、学生一人ひとりに寄り添ったきめ細かい教育を行います」。

新カリキュラムでは、1年次は学部共通の基礎・専門・教養科目の学びを行うが、2年次からは各領域・コースへ進む。他領域・コースの科目も取得はできるが、基本的には選択したコースを突き詰めていく。各コースは希望制だが、定員が設定されており、GPAによって希望のコースに進めるかが決まるため、学生は1年次から学修の重要性を強く意識している。

これまでに人気があるコースは教員養成の「学校スポーツコース」。卒業生約5000人のうち1000人以上が教員である。過去5年間の保健体育科教員の採用では、滋賀県の中学校教員では3人に1人、京都府の高校教員の5人に1人がびわスポ大の卒業生である。

○強みはアウトドアスポーツ！

間野学長の想いは教員養成からさらに広がる。それは「アウトドアスポーツコース」である。野外活動・教育・研修などのプロフェッショナルを育成する分野だ。

「琵琶湖も比良山地も徒歩ですぐ行ける。カヤック・ウィンドサーフィンは実習があり、登山とキャンプは新入生全員が必修。まだ授業では利用していませんが、琵琶湖バレイスキー場、18ホールのゴルフ場、関西最大の乗馬クラブ、多数のセーリングクラブ、自転車琵琶湖一周コース（通称ビワ一）なども15分圏内にあり、アウトドアスポーツに最適な環境が整っています。これらの資源もびわスポ大のみ。著名なアウトドアメーカー「株式会社モンベル」と包括協定を結び、キャンパス内の「野性の森」では、Action Social ization Experien ce（ASE）プログラムが体験できる。ASEは1人だけでは解決できない肉体的・精神的な課題に対して、協力し合いながら解決していくもの。チームビルディングを目的に企業研修などに導入されている。

「企業研修はもちろんのこと、近畿圏内の中学・高校もこのプログラムに参加しており、時にはプロスポーツチームも来ます。本学の学生もフレッシュマンキャンプセミナーという初年次の授業で全員が体験します」。

豊かな自然を活かして、人気のアドベンチャーレースや子ども向けのトライアスロン大会などの開催も計画しており、京都に近いことからインバウンドも含めた多様な層にアクセスができ、関西のアウトドア・レジャーの中心地にもなれる。比較的新しい小規模大学ではあるが立地・環境・教育プログラム面で、非常に潜在力が高い大学である。

とはいえ、現実には厳しい現状もある。在学生の半数がサッカー・野球・陸上競技などのアスリートであり、アウトドアスポーツの魅力は簡単には高校生には伝わらない。

「ボーイスカウト・ガールスカウト、あるいは家族で登山・キャンプ・カヤックに親しんでいる野外活動が大好きな子供たちや保護者の皆様に、本学を知ってもらいたい」という希望を胸にしている。

○大阪成蹊大学や自治体との連携

びわスポ大は文部科学省令和6年度「少子化時代を支える新たな私立大学等の経営改革支援」事業に採択された。そのテーマが、「スポーツ×自然×デジタル」であり、これまでにない斬新な教育プログラムの提供である。

「今やスポーツは、データ分析による戦略構築が常識です。新カリキュラムでは、データサイエンスとAI活用を強化しています。生成AIの活用スキルを学び、卒業論文や研究に活かす機会を充実させていきます。学内に設置された「アスリートサポートステーション」では、最先端の測定機器を活用し、蓄積したデータを分析・研究へとつなげるとともに、学生アスリート個人へのフィードバックや各運動部への情報提供などができる環境を整備しています。また、学内でスポーツデータ分析コンテストを開催し、学生の自主的な研究発表を促しています。スポーツデータ分析の専門教員を揃えていますから、この分野も強みにしていきたい」と間野学長は説明する。

同一学校法人の大阪成蹊大学には、データサイエンス学部が新設され、スポーツ分野のビッグデータ解析も研究対象としている。そこで大学間連携で、びわスポ大のアスリートや試合の各種データを収集・分析し、データサイエンス学部との共同研究を進めながら、双方の大学でスポーツデータアナリストの育成に取り組む。

○地域とのつながりと未来への展望

地域から期待されているのは、びわスポ大を拠点とした「総合型地域スポーツクラブ」の創設・運営である。すでに京都市や隣接する高島市とは、中学校運動部活動の地域移行・展開へのフィージビリティスタディを経済産業省とともに行った。就学前児童には学生と遊ぶプログラム「びわスポキッズ」を、小中学生向けにはキャリア教育プログラムも実施。高齢者向けの健康体操など周辺の自治体・施設から様々な声がかかる。こうした地域向けのスポーツ・健康への取り組みは、少子高齢化が進むなか今後ますますニーズが高まっていく。

「これらの事業をマネジメントする自立した組織を外郭団体として将来的に設置したいと考えています。この新しい組織が学生の雇用を創出し、スチューデント・ジョブの機会を提供することにつながります。地元に愛され必要とされる大学になることは、将来戦略としても重要です」。

○人を育む、びわスポ大の魅力

「本学を訪れた方は、学生が必ず笑顔で挨拶する姿に驚かれます。これは初代学長から受け継がれ、大切に守られてきた本学のレガシーです。『自分は勉強があまり得意ではない』と感じていた学生も、ゼミと卒業論文の執筆を通じて達成感を味わい、自己肯定感を高めています。実際に教員採用試験の合格者数をみれば学生の伸びしろが高いことは一目瞭然です。笑顔・挨拶・自己肯定感の成果として、本学の就職率は100％を誇ります」と間野学長は胸を張る。そして、こう続ける。

「今後ますます人口が減少し、経済も厳しくなっていきます。その中で、明るく豊かな気持ちで健康に生きていけるかが重要。人々にそのような生き方を示せる人材を送り出したい。今後は、キャンパスを重要な地域資源ととらえ、近隣住民が気軽に出入りし、あたかも公園のように思っていただき、学生とも交流してほしい。本学の食堂は、琵琶湖と比良山が一望でき、『"日本で一番"景色がキレイな学食』を標榜しており、学長カレーも開発中です（笑）」。

びわこ成蹊スポーツ大学は、恵まれた自然環境を活かしたアウトドアスポーツ、最新の測定機器と全学導入のAIによるデータ分析、地域とともに幅広い世代の運動・健康支援を通じて、今後の成熟社会で重要となるウェルビーイングを志向する、未来の人材養成の可能性に満ち溢れた大学なのである。

琵琶湖でカヤックを楽しむ学生たち